

健都オープン記念・平成30年度(2018年度)秋季特別展

東洋一の夢の跡

—吹田操車場遺跡展—

平成30年(2018年)10月6日(土)～12月2日(日)



旧国鉄吹田操車場



吹田操車場遺跡

このたび健都オープンを記念して秋季特別展「東洋一の夢の跡—吹田操車場遺跡展」を開催する運びとなりました。東洋一と謳われた旧国鉄吹田操車場は1923年から1984年まで操業され、その跡地は吹田貨物ターミナル駅ならびに北大阪健康医療都市(健都)としてよみがえりました。今秋には吹田市民病院が開院し、来年夏には国立循環器病研究センターが移転を予定しています。

この跡地の再開発に先立ち、公益財団法人大阪府文化財センターと吹田市教育委員会によって1998年以降、発掘調査がおこなわれました。そこからは旧石器時代から近現代にいたるまでの長期間にわたる遺物が多数出土しました。とくに古墳時代から奈良時代にかけての窯業関係の遺物・遺構、ならびに平安時代の総柱建物跡や条里制関連の遺構などが注目されます。

ご来館を心からお待ち申し上げます。

(当館館長 中牧弘允)

吹田操車場遺跡の発掘調査でわかったこと① 粘土採掘坑

これまでの吹田操車場遺跡の発掘調査において、JR岸辺駅の周辺で群集土坑と呼ばれる、人為的に掘られた穴が約2,000基密集して見つかりました。発掘調査を実施した（公財）大阪府文化財センターの分析によると、明らかに粘質の土を選んで掘削していることがわかり、これらの穴が粘土を得るために掘られた粘土採掘坑であると判断されました。粘質以外の砂質土のところでは建物跡が検出され、土質によって土地利用が明確に区別されていたようです。

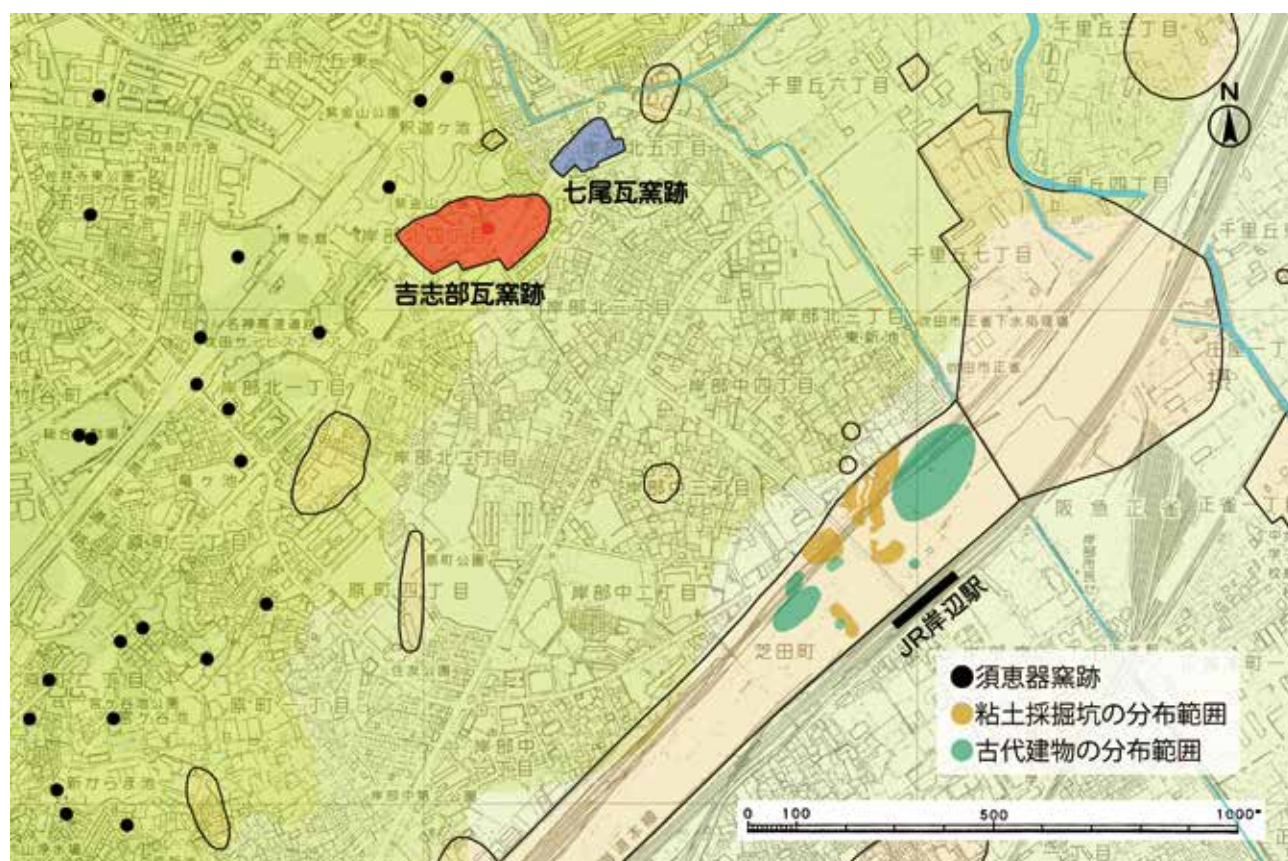
粘土採掘坑が掘られた時期については、土坑中から出土した土器の年代から判断すると、古墳時代後期～飛鳥時代（6世紀～7世紀前半）のものが主体ですが、一部、奈良時代前半（8世紀）以降に掘られたものもあるようです。

では、何の目的で粘土を掘ったのでしょうか。千里丘陵の東南部には須恵器窯跡が分布しています。6世紀～7世紀前半という時期は、まさ

に須恵器生産の最も盛んな頃で、ここで掘られた粘土がそれに利用されたと思われます。粘土採掘坑の北約1kmには、8世紀前半に創業した七尾瓦窯、9世紀初頭に創業した吉志部瓦窯があり、それぞれ、難波宮と平安宮の造営にあたって瓦を生産していました。須恵器生産終了後、8世紀前半～9世紀の粘土採掘は、瓦生産のためであった可能性があります。

吉志部瓦窯跡では、窯の直近で粘土採掘が行われていたことはわかっていましたが、須恵器と七尾瓦窯で焼いた瓦の粘土採掘地の詳細は不明でした。吹田操車場遺跡で見つかった粘土採掘坑は、古墳時代～奈良時代前半に、岸部の地で行われた窯業の工房（粘土採掘から成形、乾燥を行う場所）の解明に迫る手がかりとなる大きな発見になりました。

（高橋真希）



粘土採掘坑と窯跡の分布

吹田操車場遺跡の発掘調査でわかったこと② 嶋下郡南部条里

吹田操車場遺跡を含む、千里丘陵の東南部の平地には、嶋下郡南部条里と呼ばれる条里型地割りがあったことが知られていましたが、吹田操車場遺跡と明和池遺跡（摂津市）の発掘調査で、その実態に迫る遺構が検出されました。

条里型地割りとは、古代～中世にかけて行われた、1町（約109m）四方の正方形に土地を区画する方法です。多くの場合、その方位は正方位をとることが多く、嶋下郡には茨木市を中心に正方位の主条里がありますが、嶋下郡西南地域の当地では、地勢に合わせて主軸が西に33°傾いた条里が施行されました。

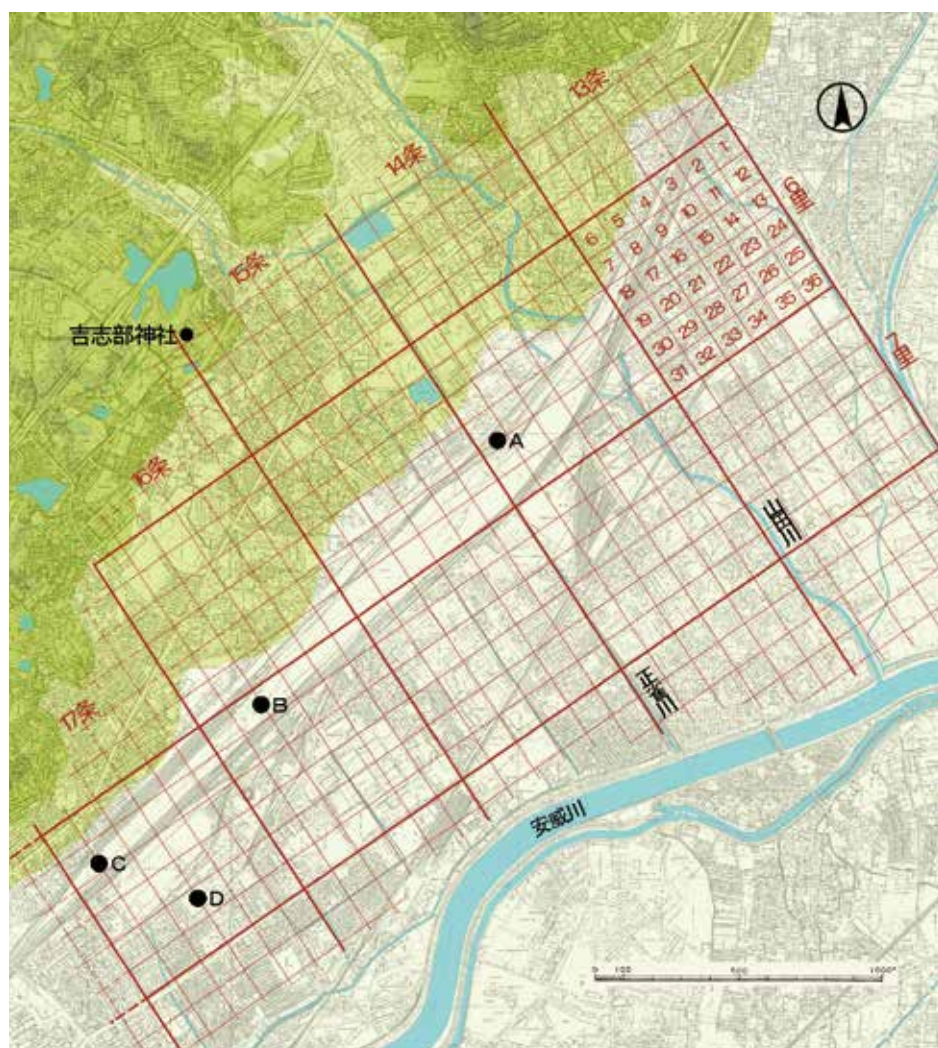
1町四方の正方形の区画を坪といい、坪ごとの境は畦畔や道路、水路などで形成されますが、吹田操車場遺跡、明和池遺跡と目俵遺跡において、これまで推定された坪境に相当する地点で、こうした坪境とみられる遺構を検出し、嶋下郡南部条里の実態を解明するいくつかの成果がありました。

条里型地割りの開発については、明和池遺跡の検出遺構から、正方形の土地区画のもととなる基準線に関して、正雀川の東岸堤防に求められ、まず、この基準線を中心に東西4町ほどが開発され、その後、周辺に拡充されていったことが明らかになりました（三宮昌弘『明和池遺跡4』大阪府文化財センター2016）。

では嶋下郡南部条里がいつ施行されたのか。その時期については、未だ明らかではありません。飛鳥時代や奈良時代の建物の主軸は正方位にとられ、条里型地割りと関連性はみられませんが、10世紀後半以降の建物主軸は西に33°傾いたものが見られるようになり、施行時期を探るひとつの手がかりではあります。

条里型地割りの名残は、現代にも見いだすことができます。基準線が明らかになったことで、これまでに見つかった坪境に関する遺構の再検討が可能になり、今後の岸部地域の耕地開発史の解明が進むことが期待されます。

（高橋真希）



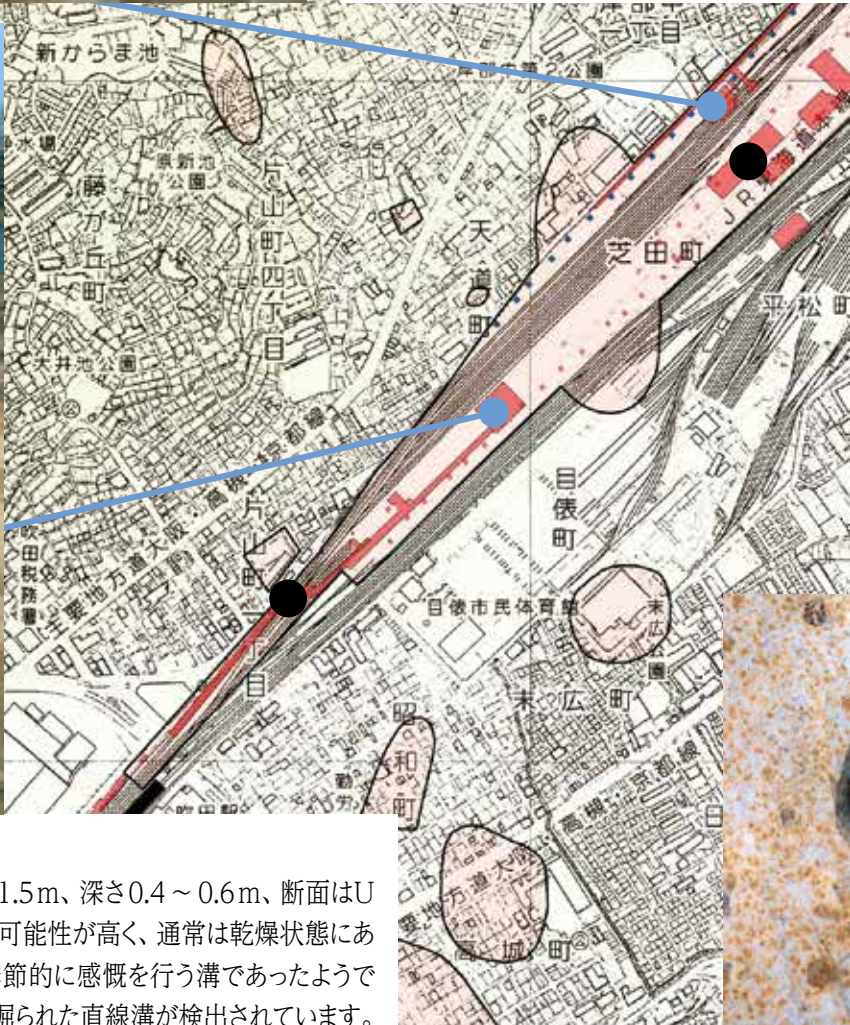
嶋下郡南部条里の推定復元図

吹田操車場遺跡は、「東洋一の規模」と称えられた旧国鉄吹田操車場（1923～1984操業）の跡地（約27ha）に広がる遺跡で、昭和42年（1967）、吹田操車場内の道路及び側溝工事に伴い、中世の瓦器碗や土師器皿が出土したため、遺跡があることがわかりました。平成10年（1998）、JR梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地に移転する計画により、大阪府文化財センターが60ヵ所のトレンチで操車場跡地内の遺跡確認調査を実施。以降、昨年度までに大阪府文化財センターと吹田市教育委員会の調査が継続的に行われ、遺跡の範囲は、吹田操車場跡地のほぼ全域に及び、旧石器時代から近代に至る時代に連綿と続く遺構や遺物が確認されました。

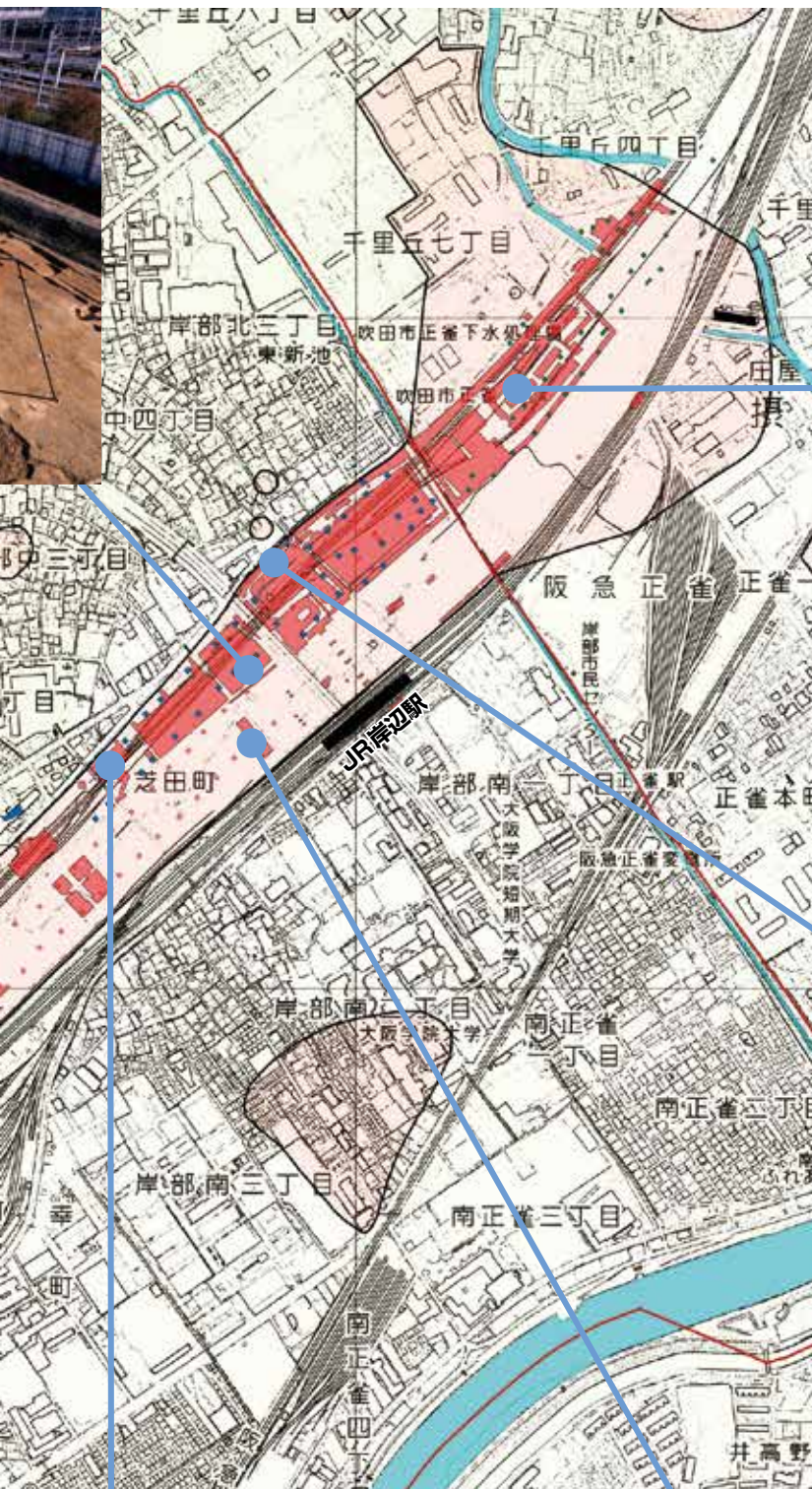


平安時代の9世紀初頭～10世紀中頃、3間(6.4m)×2間(4.5m)の身舎の四面に廂を巡らせた建物で、その北側に軒先を接するように隣接して6間(13.5～13.8m)×3間(6.9m～7.0m)の総柱建物がありました。両方の建物の間にも柱穴があり、つながっていたようです。四面廂建物は平安京内の建物とよく似た構造で、貴族階級の個人的な邸宅のとする見方が有力です。

(仮称)健都ライブラリー建設予定地で、南北の二面に身舎から張り出した柱穴のある建物跡が見つかりました。神社建築に近い構造で、10世紀後半に建てられたようです。



約170mにわたって検出されました。溝は幅0.9～1.5m、深さ0.4～0.6m、断面はU字形を呈しています。古墳時代に人為的に掘削された可能性が高く、通常は乾燥状態にあり、短期間に人為的な水流があった可能性が高く、季節的に感慨を行う溝であったようです。また、●の調査地点でも同様に、古墳時代前期に掘られた直線溝が検出されています。



明和池遺跡の発掘調査

吹田操車場遺跡に隣接した旧国鉄吹田操車場跡地の摂津市域に属する範囲を明和池遺跡といいます。

昭和8年(1933)に明和池の土取工事に伴い、古墳時代の須恵器や陶器が出土し、遺跡の存在が知られました。昭和62年(1987)には大阪府教育委員会によって初めての本格的な調査が行われ、弥生時代・古墳時代後期・中世の遺構と遺物が確認されました。

平成19～20年(2007～2008)の摂津市教育委員会による調査、平成21年(2009)以降に吹田操車場跡地土地区画整備事業に伴う大阪府文化財センターによる調査を経て、縄文時代以来の当地の歴史の一端が解明されつつあります。



粘土採掘坑

6世紀後半～7世紀前半、千里丘陵で行われた須恵器生産のための粘土を掘った跡と考えられています(2頁参照)。



奈良時代の瓦を廃棄した穴

吹田操車場遺跡では、北約1 kmにある七尾瓦窯跡の瓦が出土しますが、中には穴に意図的に捨てられた状態で見つかるものもあります。出荷用の瓦を選別して廃棄されたものかもしれません。左の写真は市民病院移転予定地で見つかった廃棄土坑(2頁参照)。

*写真は(公財)大阪府文化財センター撮影・提供



平成30年（2018年）8月9日、公益財団法人阪急文化財団館長の仙海義之さんにお話をうかがいました。阪急文化財団は当館が事務局をつとめる北大阪ミュージアムネットワークのメンバーであり、仙海さんにはシンポジウムなどでたびたび登壇いただいています。館長に就任した抱負やビジョンについて語っていただきました。

**仙海 義之**

（せんかい よしゆき）

公益財団法人香雪美術館の学芸員職などを経て、平成30年（2018年）7月より公益財団法人阪急文化財団理事・館長に就く。東京藝術大学・京都橘大学・大阪大学などで非常勤講師の経験がある。専門は日本・中国の仏教絵画史。

中牧：新館長に就任された抱負をお聞かせください。

仙海：公益財団法人阪急文化財団では、逸翁美術館、小林一三記念館、池田文庫という三つのミュージアムに加え、マグノリアホールという音楽ホールを運営しています。小林一三の有形無形の文化遺産をそれぞれのかたちで伝えています。芸術という言葉で辞書で引くと、文芸、美術、音楽、演劇、映画、建築の総称という説明がありますが、それら全てを扱っているわけです。それらを有機的に連携していくことで、他にはない魅力が出せると考えています。来年には、池田市の市制80周年に合わせて、池田ゆかりの画家である呉春の展示も開催したいと思っています。呉春と言えば今はお酒が有名ですが、お酒は呉春が活躍した100年後に造られました。

中牧：阪急文化財団の所蔵品にはどのようなものがありますか？

仙海：基本的にはすべて小林一三自身のコレク

ションです。池田文庫の前身は宝塚文芸図書館で、戦前の図書や雑誌を一括して保存しています。図書や雑誌の蓄積が、その時代の知の総体としてタイムカプセルのように残っています。私立図書館としては先駆的な存在であり、図書館史としても今後注目されると思います。

中牧：最先端を想像して、そういう試みを実行した人ですね、小林一三というお方は。

仙海：そうですね。ただ、残っていても仕舞い込んでいては存在しないのと同じです。私は大学で博物館展示論などの授業をしていますが、文化財はなぜ展示する必要があるのか、「財」とは何か、ということを最初に話します。資産的価値があるから「財」という見方をする人もいますが、実際の「財」とは、未来の文化を作るための財産であり材料です。

中牧：「財」は「材」に通じるというわけですね。

仙海：人の目に触れることではじめて、形、色、素材、技術を知りうることでできて、それが未来の文化を創造するための材料となっていくます。また、文化財を外に出すことでその価値が知られ、それを守ろうという動きにも繋がっていきます。そのため、文化財は展示する必要があります。美術館・博物館はそこに立脚しています。展示をしないなら、単なる倉庫や収蔵庫で十分であり、我々は蔵の番人でいいでしょう。何のためにわざわざ展示するのか、それが大事です。

中牧：ご専門の美術史のこともお聞かせください。

仙海：日本や中国の絵画史が専門だったのですが、そのうち仏教絵画の方に研究を進めていきました。きっかけは、大学に制作活動をする人たちが身近にいたことです。研究でも「何でこんな絵を描いたんだろう」という制作の根拠を考えたり、仏教の場合は経典などのテキストをどのように絵画で表現するかという点で、作品

制作の動機が見えてきます。そこに興味を持ちました。

中牧：吹田市立博物館の初代館長の西村公朝は、従来の仏教の図像表現に自身のイマジネーションを加えて作品を制作しました。

仙海：歴史的にもそうです。経典や前時代の造形物を根拠にして、どのようなものをつくれば同時代の人たちにアピールできるか、という工夫をしてきた歴史が仏教美術にはあります。

中牧：中国のほうのご研究は？

仙海：日本は中国美術を真似していた訳ですから、日本の美術だけを知っている、というわけには行かなくなってきました。それで中国美術にも関心を持った訳ですが、従来の中国絵画史としては、文人画、水墨画、南画といった限られたカテゴリーで語られます。本当はその何倍も、中国において絵画制作が行われてきたはずです。さらに中国では王朝が変わると前時代のものは顧みられなくなったりもするので、研究のための資料が残りづらいのです。そして研究資料がないものは歴史としては語られません。

中牧：日本のほうが中国の古美術品を大事にしているとも言われますね。シルクロードから伝わった正倉院の品々のように。

仙海：京都の大徳寺に五百羅漢図の掛軸があります。それは13世紀の中国の寧波で作られたもので、大徳寺に残っています。全部で100幅も制作されましたから、どれも同じように描いたらつまらないので、様々な手で人目を引くように描いています。それまでの中国の仏教絵画や様々な絵画技法の宝庫になっています。実に興味深いです。

中牧：中国の研究者からしたらお宝ですね。

中牧：逸翁美術館にいらっしゃる前はどちらの美術館でしたか。

仙海：以前は神戸御影の香雪美術館に勤めていました。香雪美術館は朝日新聞を創設した村山家のコレクションを扱っています。創設者の村山龍平は小林一三よりも一世代前です。香雪美術館の北側にある白鶴美術館の嘉納治兵衛コレクショ

ンも同じく小林一三より一世代前です。村山や嘉納も近代の実業家であり、茶の湯を趣味とした数寄者でもあります。世代が違えばコレクションのカラーも変わります。日本の近代化が進み、洋風化が色濃くなると、日本の伝統的な美術を顧みない時期が明治半ばくらいまで続きました。近畿でも廃仏毀釈や神仏分離で、仏像が二束三文で売られる時代がありました。村山や嘉納が美術品のコレクションを始めたのはこの時期で、そうして集められた仏像や屏風を展示したりしていました。大阪の藤田美術館も同じ時代で、古い仏像や仏画がたくさんあります。香雪美術館、白鶴美術館、藤田美術館とは数寄者同士という点で交流があり、茶の湯関連の展示も担当しました。

中牧：吹田にも西尾與右衛門（第11代）などの数寄者がいます。いろいろ繋がりますね。

中牧：北大阪ミュージアムネットワークではいつも積極的な発言をなさっています。これから仕掛けていきたい計画やビジョンはありますか？

仙海：北大阪の古墳文化などを見ると、古代からこの地は人が住み付きやすい場所だったんだと思います。水の利便性があり、入り組んだ大地が多様性をもたらしています。そこから個性豊かな自治体たちが生まれ、多様な歴史を反映した美術館や博物館があります。北大阪は、大阪や京都のような中心地をもたないエリアとしての独特の豊さを湛えているように感じています。そこを上手くすくい上げられたら、北大阪の価値というものが高まっていくかもしれません。けれども、自分たちだけではなかなかエリア全体のアドバンテージは意識できず、生かすことは難しいです。スーパーバイザーや第三者に関わってもらいたいですね。ネットワークに参加している館それぞれも高い意識を持つ必要がありますね。

中牧：本日はありがとうございました。

健都オープン記念・平成30年度(2018年度) 秋季特別展 「東洋一の夢の跡ー吹田操車場遺跡展ー」 関連イベント

●オープニングイベント

■会場／当館講座室・特別展示室

10月6日(土) 午後1時～1時50分

開会式・展示解説

●講演会

10月6日(土) 午後2時～3時30分

●「吹田操車場遺跡でみつかった古代の貴人の家」

講師／(公財)大阪府文化財センター調査課副主査

奥村茂輝氏

11月10日(土) 午後2時～3時30分

●「岸部地域の歴史と明和池遺跡」

講師／(公財)大阪府文化財センター調査課副主査

鹿野墨氏

いずれも

■会場／当館講座室

定員／120人。先着順。

●歴史講座

■会場／当館講座室

10月7日(日) 午後2時～3時30分

●「吹田操車場遺跡にみる耕地開発 ー嶋下郡南部条里ー」

講師／当館学芸員 高橋真希

定員／120人。先着順。

●展示解説

●学芸員による展示解説

10月14日(日) 午後2時～3時

10月28日(日) 午後2時～3時

11月25日(日) 午後2時～3時

講師／当館学芸員 高橋真希

●館長ギャラリートーク

11月11日(日) 午後2時～3時

講師：当館館長 中牧弘允

いずれも

■会場／当館講座室

観覧料が必要です。

●展示室クイズラリー

11月17日(土)・18(日) 午前10時～午後4時

会場／当館特別展示室

博物館ボランティア有志の会(景品あり、随時受付)

●見学会

事前の申し込みが必要です。

11月24日(土) 午後1時～4時

●「岸部の歴史を歩く」

定員／50人。多数抽選。

応募締切／11月7日(水) 必着

申込方法／はがきかファックスにイベント名・日時・参加者全員の住所・名前・電話番号を書いて当館へ。

●鑄造体験

事前の申し込みが必要です。

●「ミニチュア銅鏡を作ろうー五反島遺跡出土銅鏡モデルー」

11月3日(土・祝) ①午後1時～2時

②午後2時30分～3時30分

12月2日(日) ③午後1時～2時

④午後2時30分～3時30分

会場／当館講座室

定員／各10人。多数抽選。

応募締切／①②10月20日(土) 必着

③④11月14日(水) 必着

★イベントの申込方法

はがきかファックスにイベント名・日時・参加者全員の住所・名前・電話番号を書いて当館へ。

※特に表記のないものは参加費無料です。

【交通案内】(当館ホームページもご参照ください。)

●JR岸辺駅下車北口から徒歩20分。

●JR吹田駅北口・阪急吹田駅から

「千里中央」ゆきバス「紫金山公園前」下車徒歩4分。

「五月が丘南」循環バス「五月丘西」下車徒歩7分。

「桃山台駅前」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分。

●JR吹田駅中央口・阪急吹田駅から

「桃山台駅前」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分。

●阪急南千里駅から

「JR吹田」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

●お車の場合は、五月が丘方面からお回りください。

(吉志部神社側からは車は進入できません。)

